

## 令和6年度 綾部市総合教育会議 議事録

- 1 日時 令和6年12月19日(木)  
開会 13時30分 閉会 15時
- 2 会場 綾部市まちづくりセンター 第1会議室
- 3 出席者 綾部市長 山崎 善也  
綾部市教育委員会  
教育長 小林 治  
委員 小南 直美  
委員 波多野 芳雄  
委員 樋口 高夫  
委員 大島 友紀子  
(事務局関係)  
市長公室長 上原 季司  
企画総務部長 志賀 久男  
健康子ども部長 吉田 清人  
教育部長 大槻 伸一  
学校教育課長 斉藤 さおり  
社会教育課長 立藤 江理  
学校教育課主幹 青木 賢次  
社会教育課課長補佐兼  
社会教育主事 辻田 均  
学校教育課課長補佐 荻野 涼子
- 4 協議事項 小規模校の特色ある学校づくりについて  
学校を核とした地域づくりについて
- 5 議事の概要
- 開会
  - 綾部市長挨拶
  - 協議事項  
小規模校の特色ある学校づくりについて  
学校を核とした地域づくりについて

<議長：綾部市長>

今年の協議事項は、「小規模校の特色ある学校づくりについて」と「学校を核とした地域づくりについて」の2つです。

最初に「小規模校の特色ある学校づくりについて」事務局から説明をお願いします。

(学校教育課 青木主幹)

<議長：綾部市長>

ただ今の説明を受け、教育委員の皆様方からご意見をいただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

<波多野委員>

小規模校の良さを5点にまとめて説明をいただきましたが、その5点は視点を変えてみると、大きく二つに分けられるかと思います。その一つ目は、小規模・少人数ゆえに必然的に生じてくる良さ、二つ目は小規模・少人数を意図的に生かすことで生じてくる良さ、この二つに分けて考えたいと思います。

小規模校においては、先ほど分類した二つ目の意図的な取組を創意工夫し、積極的に実践しなければ、特色ある学校は生み出せないだろうと思います。

市内における小規模校では、少人数ゆえに様々な教育活動の中で、隣の学年と、低学年と高学年で、全校でなど、色々な組み合わせでの取組を作り出しています。このような取組から、日常的で濃密な縦の人間関係、異年齢の活動によって、子どもたちの学びの幅がとて広くなります。先輩から後輩へと、文化の継承が可能になってきます。

少人数ゆえに、一人ひとりの体験の質が深く充実したものになる、また地域の方や保護者との距離がとて近いことも大きな利点です。その近さを活かすことによって、教育活動を充実させることができ、その充実によって特色も生じてきます。

学びの場所の広がり、学びの人の広がり、学び方の広がり、学びの内容の広がりなど、学校にとって、その地域は教育の宝庫となりうると考えられます。その小規模校で学ぶ子どもは、一人ひとりが自立し、自分の考えを堂々と表現するようになり、学ぶことの良さや楽しさなど身をもって体得し、地域の中で育てられていることを実感し、自分の育つ地域を愛する心を育みながら、大きくなっていく。このように大きな効果が期待できるのが、地域に根付いた特色を出しやすい小規模校だと考えています。

小規模特認校制度については、子どもにとって良いシステムであると考えますが、この制度を活用するとき、保護者にとってネックとなるのは、学校への送迎ではないかと考えます。

あやバスを上手く活用できる方法の検討など、保護者負担の軽減も合わせ綾部ならではの温かいシステムをセットで工夫されることを期待します。

#### <樋口委員>

小規模校が多い本市では、小規模校における特色・良さは本市の教育の特色・良さでもあります。小規模校では、様々な活動をとおして体験的に学ぶため、子どもの心に響き、実感を伴った学びができ、また地域の素材を教材として扱うので子どもが当事者意識を持てるのが魅力です。地域のよさを理解・実感することになり、より「ふるさと」に愛着を持てるのではないかと思います。地域の方や友達とのコミュニケーションを取りながら協働して学ぶことから、個々のコミュニケーション能力や社会性の育成にも効果的であると考えます。

子どもの数の減少により、学校自体が極小となっている中で、小規模特認校制度を導入することで複式学級を減らす、これ以上増やさないことを期待できると思います。地域から学校がなくなることが先延ばしにもなります。

また、小規模特認校制度が、不登校や学校に行きづらい子どもの受け皿となり、手助けになるなら、この制度を活用してもらうことが大事です。

デメリットも考えられるが、学校間の交流、ITを活用した合同授業など、工夫することでデメリットは縮減できます。

ただ、この制度を市民へのPRをする中で、小規模校から大規模校への願いを持つ、環境を変えたいという希望があるかもしれないので、制度自体を一定の規則の中で運用することが大切だと思います。

#### <事務局>

すべての児童生徒・保護者が学校を選択でき、小規模校から大規模校へ選択できるようにすると、小規模校の児童数が減り、学校が存続できなくなる可能性があるため今回の選択肢には入れておりません。

ただ、本制度ではないですが、不登校などで教育的な配慮が必要な場合は、指定外就学制度を用いることで小規模校から大規模校へ通学できる方法はあります。

#### <大島委員>

小規模校では、きめ細やかな指導が行われ、個々の活躍の場を多く設定できると説明されましたが、実際に学校を訪問し、授業を見せていただくとそのとおりだと感じます。

特に、実験や実習の場面でそう感じますが、理科で実験をする際は、実験器具に触れて、観察して、結果を記録して、自分で予想をたてるところから考察まで、フル稼働できるため、暑くなってはおっていた上着のシャツを脱いで半袖になった児童もいました。前のめりで興味を持って学習している様子が伝わってきました。

家庭科での「出汁を取る」授業では、自分の子どもが通っている学校では、先生が2つの出汁を作って、そこに塩を足したり、醤油を足したりして試飲していましたが、訪問した小規模校では出汁を取るところから実習があり、それでみそ汁を作り、盛り付けるお椀を選んだり、ランチョンマットを敷いて見栄えよく写真を撮ったり、最後には給食とともに食べるということをされていました。教科書の内容にプラスαのことができ、子

どもたちが疑問に思ったこと、その場で拾い上げやすいのも小規模校ならではの特徴だと感じました。

また、係活動や委員会活動、掲示物等を見て、人数が多い学校だと細かく色々なものがあるところ、少ない学校だと沢山の種類は作れないので、自分たちのクラスには何が必要か、自分たちの学校には何が必要かということに加えて、それぞれの個性や好みを交えながら、何をやるかを考える、厳選することができていると感じました。個性を生かした役割があり、ちゃんと居場所がある安心感にもつながっているのではないかと思います。

また、私は計画訪問で市内全部の小・中学校に行かせてもらう機会がありますが、ほとんどの親はそんな環境になく、就学・進学タイミングで何の疑いもなく校区の学校に通うものだと思います。どこに、どんな学校があるのかも知らないのが現状で、「小規模校＝個々に目が行き届きやすい」ということは想像ができますが、どう良いのか、どういう実践がされているのかについては分かっていません。

制度を導入する際には、小規模校の良さを知ってもらい、小規模特認校という選択肢があるということ知ってもらうことが課題で、制度を利用したいと思えるかは PR に懸っていると思います。

#### <事務局>

今後、小規模特認校制度を導入した場合は、制度自体の認知度をあげるとともに、対象校はどのような学校であるか、どのような特色があり、どのような活動・取組をしているかをわかりやすく保護者や市民に周知していく必要があると考えています。募集段階で対象校の紹介や PR をしていきたいと思います。

#### <小南委員>

小規模校の良さは1人1人が主役になれて、様々な体験ができるところにあると思います。また、社会に出てから仕事で直接毎日関わる規模を考えると5～6人、多くて10人くらいなので、小規模校で育ったから社会に出て困ることはありません。それよりも自己肯定感を高め、自分に自信を持てる教育が大切だと思います。

小規模校で丁寧にみてもらいたい、大人数の集団で学習や生活をするのが不安な子供やその保護者には、小規模校はとてもよい環境だと思います。小規模特認校制度は、不登校や大規模になじめない子ども、個別の関わりを必要とする子どもが救われるいい制度ではないかと思います。

学校へ訪問すると、学校毎、年度毎に表情が変わります。現場の先生方の元気に左右される所が大きいのではないかと思います。人を元気にするのは人であり、先生の活気や働きがいがとても大切になってきます。小規模特認校制度を導入することで、小規模ではありますが、特色のある学校をアピールし、前向きに選択できる良い制度になるのではないかと考えます。

<教育長>

小規模校のそれぞれの特色を市民に伝えていく、魅力ある学校づくりをしていくことが大切です。小規模校は、児童・生徒全員が名前、顔、性格などをわかっており、家庭的な雰囲気、学校と地域がひとつのファミリーのようになっており、心の教育の充実にとても役立っています。

小規模特認校制度については、小規模校のよさを活かした教育が受けられる選択肢が増えるため、学校ごとの違いを出し、行きたい学校を前向きに選べる機会にしてほしいです。また、学校への行きにくさについても、小規模校へ通うことで、自分の居場所を感じることができ、登校できるようになることも期待できます。

大規模校、小規模校どちらかに賛成するのではなく、どちらにもメリットとデメリットがあり、メリットを最大化し、デメリットを最小化できるように工夫していくことが大切だと考えます。

今後も、小規模校の良さを生かす創意工夫と、市民や保護者への周知、広報やHP、見学会、動画配信、未就学児へのPRなど様々な方法で発信していきたい。

<議長：綾部市長>

小規模校が全て良いという訳ではないが、小規模校のマイナスを補って、プラス面をよりよく出していく知恵が必要。学校長以下の教職員全員が共通認識を持って、地域と一緒に頑張れるかが問われている。最近「廃校利用」がもてはやされているが、私が市長になってからは統合した学校はないが、地域に学校があるということは、地域にとってとても重要。

今、上林小学校の児童生徒の半数がUターン、Iターン者の子どもで、「地域に学校があるから入ってきた。」という判断材料になったとの声も聴く。

小規模校の魅力ある教育を打ち出すためには、小規模特認校制度が有効な手段であり、児童・生徒が学びたい学校を選択でき、小規模校が活性化され、特色づくりが強化される。また、地域のコミュニティーや防災の拠点ともなる学校を存続させることにもつながっていくと思う。

<議長：綾部市長>

続いて、「学校を核とした地域づくりについて」説明をお願いします。

(社会教育課 辻田社会教育主事)

<議長：綾部市長>

ただ今の説明を受け、教育委員の皆様方からご意見をいただきたいと思います。

<波多野委員>

平成18年頃だったと思いますが、当時小学校に勤務していましたが「放課後子ども

教室」が社会教育課の指導員の方と、地域の有志の方とで開催されることになりました。

当時私は、「子どもの教育は学校が担うものだ」という考え方が強かったのか、地域の方に「うちの学校の子どもが大変お世話になっている」という気持ちが強く、お会いするたびに「ありがとうございます。お世話になっています。」と声をかけていました。しかし、ある時、地域の方が「そんなお礼を言われることはない。」と返されたことがありました。

今にして思えば、地域の方たちは、「学校だけに任さず、自分たちにできることで、子どもと関わっていきたい。先生のためではなく、子どものため・自分のために動きたい。」と思っておられたのではないかと想像します。学校で何とか育てなければという思いが強かったですが、もっと地域の方々に頼ってもいいのだということを教えられました。

子どもたちにしても、学校の先生との勉強だけでなく、地域の方々と触れ合うことで、人との付き合いのマナーを学んだり、ルールを知ったり、地元の事を学ぶことで、郷土愛が育ったり多くの効果が期待される協働活動だと思います。

しかし、地域の方の高齢化などで、人材確保の困難さが生じてきています。保護者の方の積極的な関わりを期待したい。我が子らの姿を見つめなおす、よいきっかけにもなり、保護者にもメリットがあるのではないかと思います。そのようなシステムについて一度考えてはどうでしょうか。さらに、「地域学校協働活動」という呼び方、少し難しい表現だと思いますので、綾部らしい柔らかい名前を考えてはどうでしょうか。

#### <樋口委員>

地域が子どもたちや学校と一緒にやる活動は、綾部市では昔からどの地域でもやっている活動だと思います。私自身も子ども時代は、火の用心や川遊びや祭りに参加していましたし、今の小中学生の親世代は地域プールや夏祭り、ラジオ体操などをしていました。現在も私の地域では、合唱への参加や公園での交流などを通して子どもたちと関わり合っており、祭の会場には、普段から交流のある多くの子どもたちが集まってきました。

小さなことではありますが、子ども時代にふるさとで楽しく過ごしたということが、かけがえのない思い出となります。また、親世代になって立場が変わって参加していくとふるさと愛につながっていきます。地域で一緒に活動することで、社会の一員であること、自身も役にたっていることを自覚できるのではないかと思います。

地域をあげて、子どもを見守り、関わり、安全で住みやすい地域づくりをしていくことが大切だと思います。

#### <小南委員>

私は小学校で本の読み聞かせボランティアに参加していますが、活動を行うことで子どもたちと関わる機会が増え、地域の方にとっても、児童にとっても顔が見える関係づくりにつながっていると思います。

また、ボランティアで学校に行くことで、地域の学校のことがより理解でき、応援も

できるようになってきます。こちらがやりたいことではなく、学校がしてほしいことを見つけて、協力していく姿勢が大切だと思います。

読み聞かせボランティアのメンバーは、入れ替わりもありますが一定数確保できていましたが、コロナ禍で7人まで減少しました。コロナによる制限が解除されたあと、一緒に活動をするメンバーを集めることに尽力しましたが、低学年の保護者の参加が増え、学校に協力的な保護者がたくさんいると実感しています。ただ、共働き家庭も増えており、今の人数を維持するのが精一杯というところが実情です。

他の活動も同じだと思いますが、活動するメンバーをどのように維持・確保していくかということも課題になってくると思います。

#### <大島委員>

昨年度まで子どもが小学生だったので、地域の方の登下校の見守り活動をより近くで見て、参加していましたが、朝、子どもたちの中には機嫌が悪く出発できなかつたり、途中で歩けなくなつたりということがありますが、地域の方に話を聞いてもらいながら登校し、先生方につないでもらっている場面を沢山見ました。子どもたちも毎日出会う地域の方々を頼りにしており、地域に見守られているという実感を持っていると思います。また、市全体で活動があるので、地域全体の防犯にもつながっていると思います。

放課後子ども教室では、地域の方々から家庭では教わるできないことを教えてもらい、生活の知恵は生きる力、こどもの自信にもつながっていると感じます。

私自身も茶道を教えにいき、サポートする立場で子どもたちと接する機会がありますが、それぞれの得意が見える、新たな面が発見できる場面もあります。子どもたちとの雑談の中では、楽しみにしていることやちょっとした悩みや心配事を話してくれます。子どもたちは普段とは違う姿をみせ、子どもたちにとっては認めてもらえる場所、家庭・教室以外にも居場所があることは大切だと思います。

また、近年「犯罪実行者募集情報に応募している方へ」いわゆる闇バイトに関する注意喚起でお便りが配られますが、地域全体で子どもを育てる、見守っていく意識が高まれば、加害者にはならないのではないかと思います。

#### <教育長>

子どもたちは、社会のつながりの中で学ぶことで、生きる力を育み、変化の激しい社会において、困難を乗り越え、未来に向けて進む希望や力になっていきます。

今は人と人が繋がることに高い価値観感を持つ人が多く、地域と学校が交流することで、お互いがWINWINであることが大切で、だから持続していくことができる。地域と学校との交流が、子育てへの支援、地域の活性化につながる。こういった活動・交流の積み重ねがふるさとへの愛着を深め、子どもが綾部に戻ってくる要素となるとおもいます。

<議長：綾部市長>

明治大学農学部の小田切徳美教授が書かれた「にぎやかな過疎をつくる」という本の中に、過疎が進んでいく地域においては、集える場所、枠組みは欠かせないという記述があり、それは、地域学校協働活動であったり、PTA 活動であったり、消防団活動、公民館活動などがあてはまる。

今は時代の端境期。ある時思ったことが持続できるしかけが必要。

低密度の地域の持続のためには、①内発的要素、②地域性の反映されたもの、③革新性のあるものの3つのことが必要で、様々なことを仮定して考えることが大事になってくる。他市での廃校となった地域の事例を分析することなども必要。

地域と学校の協働活動を促進することにより、児童生徒のふるさと愛が高まり、綾部にUターンするきっかけになる。私も毎年中学3年生を対象に市長ふるさと講座を行っており、同様の思いで発信を行っている。

- 教育長挨拶
- 閉 会